

2006年(ワ)第6484号 謝罪及び損害賠償請求事件
原告 王 子雄 外39名
被告 日 本 国

意 見 陳 述 書

2008年7月7日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国重慶市大渡口区革新村19棟60号
重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 鄧 華均

1、私は鄧華均と申します。現在、重慶市大渡口に住んでいます。1930年10月18日に重慶市江北県龍王郷沙河壩の鄧家祠堂で生まれました。

1939年5月当時、私は8歳半で、家族は、父鄧明清（当時34歳）、母鄧胡氏（当時30歳）、私（当時8歳半）と弟鄧煥章（当時6歳）の4人家族でした。

私は、1939年5月3日の日本軍の重慶市街地に対する無差別爆撃によって父と母を殺された重慶大爆撃被害者です。

2、私の父鄧明清は、1905年10月13日に、私と同じく重慶市江北県龍王郷沙河壩の鄧家祠堂で生まれました。父の兄弟は7人（男5人と女2人）で、父は上から3番目でした。1920年頃、鄧家には、父方の祖父母、父とその4人の男兄弟（私の伯父鄧正祿、3番目の叔父鄧正洪、4番目の叔父鄧正秋と5番目の叔父の鄧正銀）と2人の姉妹（私の伯母）の計9人が一緒に生活をしていました。鄧家では、もともと祖父の代までは代々農業で生計を立てて生活していました。父とその兄弟も農業の仕事を手伝っていました。

3、しかし父は、1923年に18歳のとき、兵役から逃れるために重慶市街地に出て新しい仕事を見つけて自活するようになりました。父はもともと働き

者でしたので、間もなく重慶市の打銅街で雑貨店を開いて商売を始めるようになりました。父は打銅街に2階建の建物を借りて、その一階を店舗に使い、二階を住まいとして使っていました。

それから3年後の1926年、21歳になった父は、母の鄧胡氏（当時17歳）と結婚し、夫婦で店舗の建物の2階で住み始めました。

父は商売熱心でしたし、その上母も仕事に協力的でしたので、商売の方は大変繁栄し、間もなく打銅街の店舗以外に4カ所に店を拡大し、計5カ所の店舗を持つようになりました。

その5カ所の店舗のうち、打銅街の雑貨商の店は父が母の協力を得て経営していました。それ以外の4カ所の店舗も父が資金を出したものでしたが、各店舗の責任者を4人の兄弟に頼んで引き受けてもらっていました。

こうして父が中心となりながら鄧家全体で重慶市街地に5カ所の店を営むようになりました。

なお打銅街以外の4カ所の店舗とは、道門口の炭の店（伯父の鄧正禄が経営）、龍王廟街（解放後の民族路、現在の五一路）の衣料品の店（3番目の叔父鄧正洪が経営）、機房街の食品加工の店（4番目の叔父鄧正秋が経営）、大什字のお菓子屋（5番目の叔父の鄧正銀が経営）でした。

4、父の住まいは、重慶市街地の打銅街でしたが、両親は5カ所の店舗の営むでとても忙しかったので、私は幼いときから江北県の鄧家祠堂で祖母と父の末の妹（私の叔母）に育てられてきました。

弟の方は江北県の鄧家の実家と重慶の打銅街の間を行き来して生活していましたが、1938年秋には日本軍による重慶爆撃が始まったため、同年暮れから弟も江北県の鄧家の実家で生活するようになりました。

私の当時の生活状態は、父の商売が大変繁盛していたため、私の家は江北県下では有数の富裕な家庭でした。祖母の誕生祝いのときには百席を超える規模の宴会を行ったそうです。また1938年には鄧家祠堂の付近で広い土地を購

入しましたが、翌1939年、父はそれらの土地を売って家族の全員を重慶に移させる計画を準備していました。

もちろん父と母は、私のことをいつも気にかけてくれていました。両親は、私を地元の塾に通わせ勉強する機会を与えてくれました。両親は実家に来るたびに、子供の私が欲しい物を考えて買ってきてくれたり、しばらく実家に来れないときには、贈り物を届けてくれたり、時にはお金を送ってくれたりしました。また風雨が激しかったりして塾通いが難しいときに、私のために人を雇って私を背負って塾に通えるようにしてくれたこともありました。

このように私は、父と母が日本軍の爆撃によって殺されるまで、他人に羨まれるような恵まれた生活を送っていました。

5、1937年7・7事変以降、日本帝国主義は、中国に対する全面的な侵略戦争を開始しました。1938年から、日本軍は国民党政府の臨時首都となった重慶に対して爆撃を開始しました。

1939年には、世界中を驚かせ、世界中の良心的な政治家や市民やジャーナリストの怒りの声を引き起こした、「五・三、五・四」の大爆撃を強行しました。

私は、3番目の叔父から、両親が亡くなった1939年5月3日の爆撃のことについて何度も教えてもらいました。以下、その叔父の話を中心に1939年5月3日の爆撃被害のことについて述べます。

5月3日の昼すぎ、重慶市内に空襲警報が鳴り響きました。人々は慌しく防空防洞などをめざして避難しました。まもなくして日本軍の飛行機が重慶市の上空に飛んできて、重慶市内に大量の爆弾と焼夷弾を投下しました。瞬く間に、重慶市内は至る所に濃煙に包まれ、火柱があがりました。爆発音、家屋の倒れる音、人々の泣き叫ぶ声などが入り交じって聞こえました。

破壊された家屋は数え切れません。木々や電線を見ると、切断された腕や足や人の内臓が引っかかっていたいました。担架が通過した跡には黒っぽい血の太線

が残されました。重慶市街地ではいたる所で、まさに地獄のような悲惨な情景が繰り広げられました。

日本軍機の爆撃は1時間以上続き、午後2時半過ぎ、ようやく日本軍機は立ち去り、警報解除が知らされました。

6、次に、私の両親が5月3日の爆撃で殺された状況について述べます。

5月3日、父と母は、一番目の伯父の鄧正禄が管理していた道門口の店舗で経営上の問題が発生したため、道門口の店舗を視察に行きました。父と母は、その視察のために爆撃警報が鳴った後も避難する暇がありませんでした。

3番目の叔父鄧正洪は、警報が鳴ってからすぐ避難しましたが、警報が解除された後、市中区に戻りましたが、道門口あたりは爆撃されたと周りの人から聞いたのですぐ道門口の店舗を見に行きました。

道門口の炭の店は爆撃を受け倒壊していました。三番目の叔父鄧正洪は、倒壊した家屋の下に、体が埋まった状態の、血だらけですでに息が絶えた父と母の死体を見つけました。

父は全身が倒壊したレンガに埋まった状態で、母の方は顔が血まみれになって容易に見分けることさえ出来ないという酷い状態でした。母は亡くなったとき、妊娠8ヶ月でした。その胎児も日本軍の爆撃で殺されたのです。

7、三番目の叔父は、死んだ父と母の遺体を掘り出してくれました。その間に、店の店員さんが江北県の実家にやって来て、叔母や私と弟に、父と母が爆撃で死んだことを知らせてくれました。私と弟は、両親が死んだという話を聞かされて思わずワッと泣き出しました。涙が止めどなく溢れ出て、底なしの悲しみに襲われました。また孤児となった私と弟は、今後どうやったら生きていけるだろうかという不安で一杯でした。

その後、三番目の叔父鄧正洪は、両親の遺体を棺桶に入れて江北県の鄧家祠堂まで運んできました。葬式が行われた後で、両親の遺体は墓の中で合葬され

ました。葬式に参列した私と弟は、葬式の間中激しく泣きじゃくりました。

両親の遺体を実家に送る前に、祖母の鄧王氏は親戚の家に行かされました。周囲の人たちは祖母が二人の遺体を見たらショックに耐えられないと思ってそうしたようです。私も棺桶の中の両親の姿を少しでも見たいと言ったのですが、周りの大人たちが最後まで見せてくれませんでした。このことが今までも心残りです。

8、両親の墓は現在もあります。私たち鄧家では、何の罪もないのに日本軍の爆撃によって殺された両親の霊を慰めるためしばしば墓参りをします。

新中国になった1950年代に、ある地元の村人が両親の墓の近くの農地を耕作しようと言い出しました。しかし、当時の生産隊の隊長は、日本軍の爆撃で殺された両親は死んだときとても悲惨な状態だった、二人の霊を騒がせてはいけないから、その墓地の周りを掘るのはいけない、と言って墓はそのままに残りました。

9、5月3と4日の日本軍による重慶大爆撃爆撃によって、打銅街、道門口、龍王廟街、機房街と大什字にあった5つの店舗は全て破壊されました。

残忍な重慶大爆撃は、私の父と母が商売で辛勞して築き上げた財産をすべて破壊したのです。

重慶大爆撃以降、生き残った4人の叔父たちは、生活を維持するために苦勞を続けてきました。しかし、いくら頑張っても生活は良くなりませんでした。

私の一番上の伯父鄧正祿は、生活が苦勞で最後は行方不明となりました。四番目と五番目の叔父は、重慶市内の店が爆撃された後、市街地では生活を続けられなくなり江北県の鄧家祠堂に戻りました。しかし、江北県でも生活の貧しさは変わらず、お金がないため結婚することもできず、結局、孤独のまま相次いで肺結核で亡くなりました。

10、三番目の叔父と叔母が、両親が亡くなった私と弟を扶養してくれました。

爆撃の後、叔父と叔母は私と弟を連れて、江北県復興場という小さい町に移転し、そこで叔父は小さい飲食店を経営し、かろうじて一家の生活を維持しました。

私は、江北県復興場に移った後、1939年の後半から1945年の6年間の間、復興場の小学校で勉強しました。小学校卒業後、中学校に入りたかったのですが、お金がないため進学を断念しました。

その後、私は、1952年に夫の秦為圃と結婚するまで、ずっと叔父の店で手伝いをしていました。二度と学校に行くことはありませんでした。

1958年から、私は、大渡口区鋼花デパートの従業員として勤めるようになり、1981年11月に定年退職するまでその職場で働きました。

70数年の人生を振り返ると、重慶大爆撃で両親が殺されたために、私の人生は苦勞の連続でした。重慶大爆撃がなかったら、私はきっと良い学校に入って中学校以上にも通えて、思う存分勉強できて、人生は全く違っただろうと思います。

11、日本軍国主義は、私の家を破壊し、私の両親を殺し、私と弟を孤児にさせ、半世紀の間苦しめました。私は決して残虐な重慶大爆撃を忘れません。

日本政府は、私たち重慶大爆撃の全ての被害者に対して、罪を認め、謝罪し、損害の賠償を行うことを強く求めます。

以上

中国語で記載したものを忠実に日本語に翻訳しました。

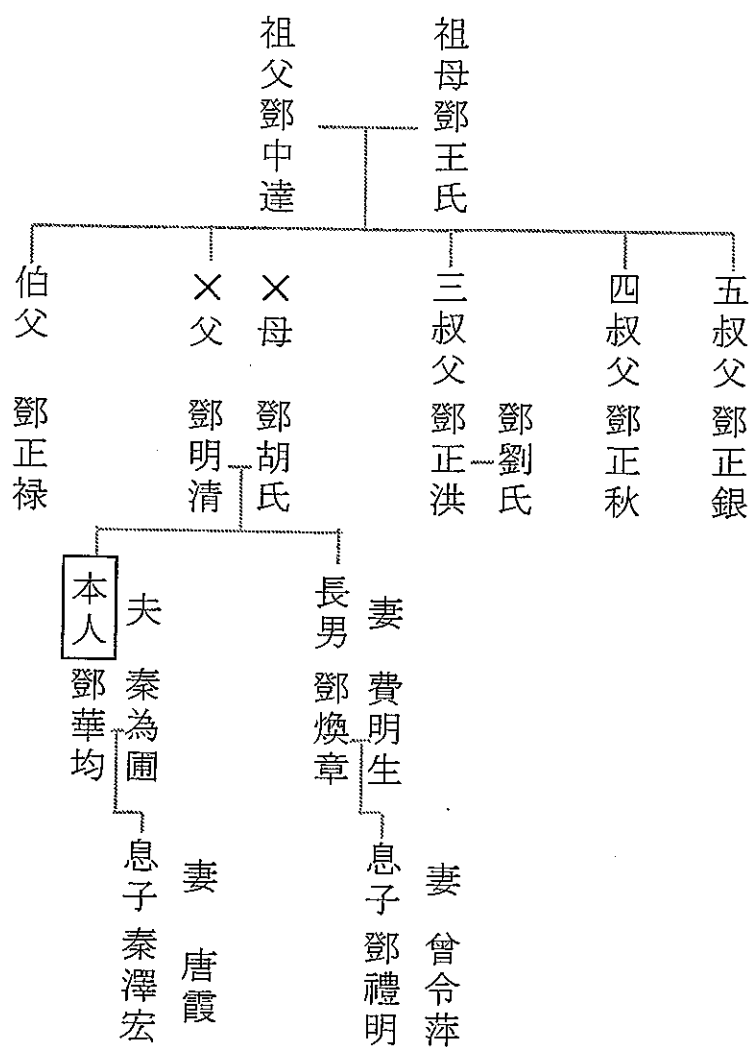
2008年7月7日

東京都西東京市富士町5-5-8

馬 蕊



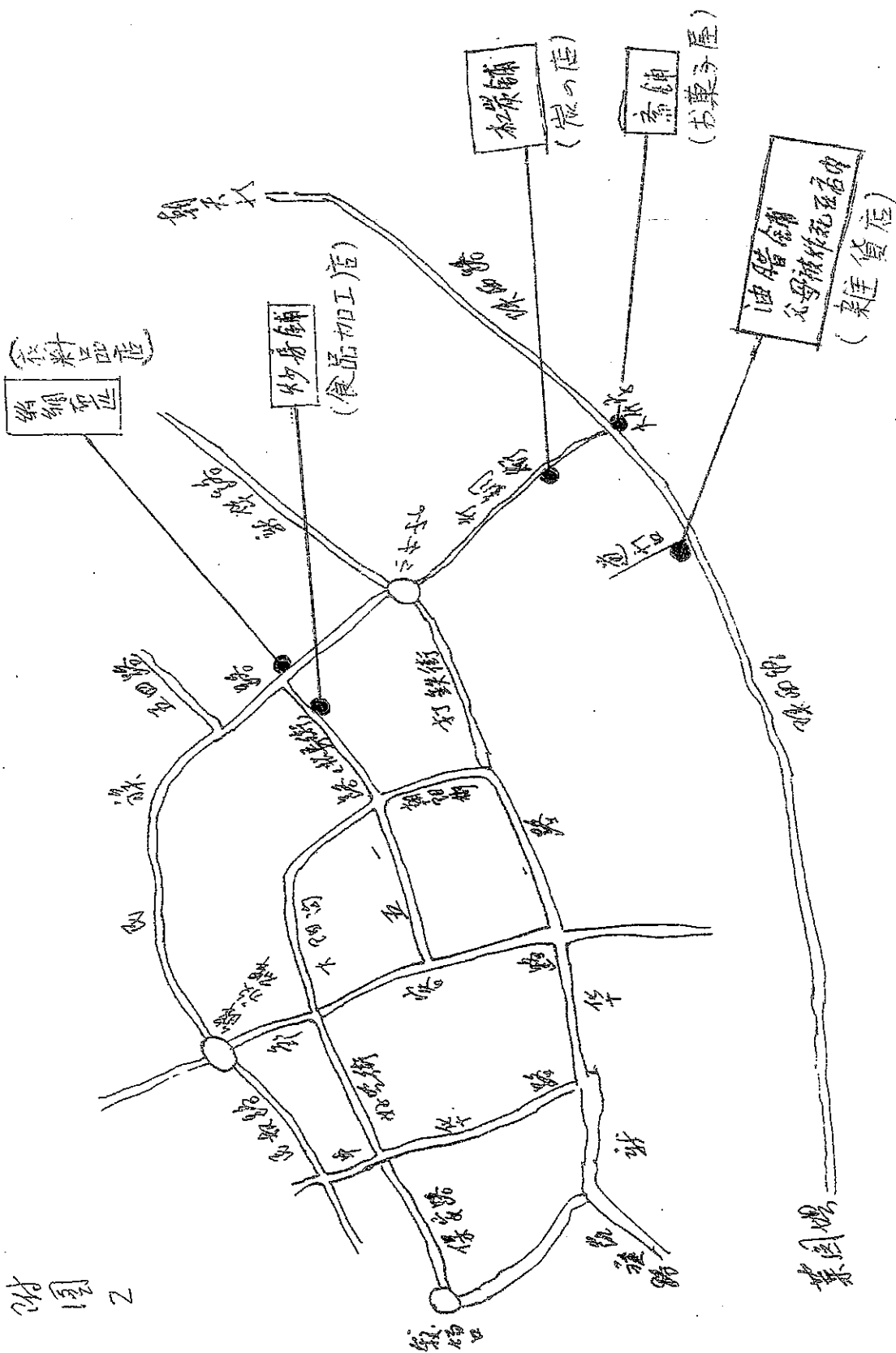
重慶大爆撃被害者鄧華均の家族図



× は死亡
□ は陳述者

鄂坪村家安平示意图

附圖 乙



5月3日の資料地点(黄)、5月4日の着弾地点(緑)、大梁子(青)、旧城郭(ピンク)、中央公園(緑)を図上「重慶市街道図 重慶書店出版 民国28年(1939年)」に加筆)にする。

黨憲市道圖

